

生活に根ざした教え

旅すれば見つけものあり、居座れば糧尽きるのみ
Mandehandeha be raha hita, mipetsapsake be raha lany.

飯田 卓

(いいだ たく)

本館民族文化研究部

人生は
決まり
文句で

言い訳として

しかし、そうしたことわざはえとして、逆手にとつて使われることも多いようだ。つまり、たいした用事もなく歩き回ることの言い訳のために、このことわざをもち出るのである。少なくともわたしは、このことわざを使うことで、面倒な訪問目的を

そこは日常生活の場とは異なる。寝たり食ったり休んだりする場所を離れてはじめて、彼らは日々の糧をえる。だからこそ、ふだんの生活を離れて動き回ることが美德とされ、逆にそこに居続けることが悪徳とされるのである。表題のマラガシ語の「ことわざ」は、そうした道徳觀をあらわしている。

語呂を考えて訳してみたが、原文に忠実になるなら「歩き回ることは見つかること（を）多くもたらし）、座ることは尽きたるもの（を）多くもたらす」となる。簡潔な言葉だけを使いつつ、生活に深く根ざした教えをいいあらわしている。この点こそ、この「ことわざ」のすばらしさである。

わたしにとって、海は稼ぐ場所なのである。そこは日常生活の場とは異なる。寝たり食ったり休んだりする場所を離れてはじめて、彼らは日々の糧をえる。だからこそ、ふだんの生活を離れて動き回ることが美德とされ、逆にそこに居続けることが悪徳とされるのである。表題のマラガシ語の「ことわざ」は、そうした道徳觀をあらわしている。

かくて、今でもほんどの人たちが、網でとつたり釣つたりした魚を売って、現金收入を得ている。都市部では必ずしもそうではないが、カヌーを使って村から村へ荷を運んだり、外国人観光客をカヌーで別の町に運んだりして生計を立てる人も多い。

彼らにとって、海は稼ぐ場所なのである。そこは日常生活の場とは異なる。寝たり食ったり休んだりする場所を離れてはじめて、彼らは日々の糧をえる。だからこそ、ふだんの生活を離れて動き回ることが美德とされ、逆にそこに居続けることが悪徳とされるのである。表題のマラガシ語の「ことわざ」は、そうした道徳觀をあらわしている。

いちいち説明せずにすんだ。

たとえば村に住んで調査しているとき、村のなかでもあまり訪れない方向へ足を向けることがある。目的がないわけではない。小さな村だと、数日顔を合わせないたけでも、長く会わなかつた気になる。だからわたしは、よい人間関係を保つため、そして、調査を進める手がかりになりそうな話を見つけるため、村じゅうを歩き回る。しかし、そんなことを相手に説明するのは無粋ではないか。そんなとき、「このことわざをもち出してみる。

わたしが最初に挨拶を交わすのは、家の外で座っているおとなたちである。このとき、訪問者であるわたしがますゞ口を開かなければならない。「こちらの皆さんは、いかがお過ごしですか?」「結構ですよ、変わったことはない。そつちのほうはどうがね?」「わたしのほうも変わりありませんよ」こうした儀礼的なやりとりに続いて、ようやく会話らしい会話が始まる。「しばらく見なかつたな。どこにいたのかね?」「村に居ましたよ。○○のところです」と××の話を聞いていたけど「またノートに字を書いていたのがね。××についてならわたしも知っているから、話してやろうか?」「いえ、結構。もう書くには疲れました。あなたには会いに来ただけですよ。『旅すれば見つけものあり』といいますからね」「ははは、本当だな。『居座れば糧尽きるのみ』だな」訪問されたほうも、うるさい質問に答えてながらインタビューや受けるより、気楽に話をするほうがよいと思っているのだろう。わたしたちは、さしたる訪問目的がないことに感謝しながら、ひとときを過ごす。わたしのほうは、それほど大きな期待をもつて訪問したわけではないのだが、しばらく後には、本当に何かを見つけた気になつて家路にひく。

